琉球大学学術リポジトリ

原稿『南洋群島の研究』第五章 経済（續き）
第一節 島民の経済

メタデータ	言語:
	出版者:
	公開日: 2018-04-16
	キーワード (Ja): 矢内原忠雄, 南洋, 原稿, 南洋群島の研究
	キーワード (En): Yanaihara Tadao
	作成者: 矢内原, 忠雄
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/38166

矢内原忠雄文庫

史料名	原稿『南洋群島の研究』第五章 経済（續き） 第一節 島民の経済(199-251)
封筒番号	260
原文所所蔵者	琉球大学附属図書館
撮影年月日	平成 17 年 11 月 15 日
撮影者	富士写真フイルム 株式会社
備考	

矢内原忠雄文庫

封筒番号： 260

史料名	原稿『南洋群島の研究』第五章 経済（續き） 第一節 島民の経済(199-251)
資料形態	B4原稿用紙
枚　数	53
頁　数	53
縦（cm）	
横（cm）	
厚さ(cm)	
書誌的事項	南洋 今泉分類記号： Y

琉球大学附属図書館

改頁

第五章　経済（續き）

第一節　島民の経済

一、発達段階

島民の中でも、チヤモロ族とカナカ族とは異なり、前者は後者に比し一般的に進んで居る。蓋しチヤモロ族は

経済発達の段階は社會制度及生活様式も西人渡來の当初に於てはカナカ族と同様のものであつたが、十六世紀以來久しくスペインの統治を受けし為め、獨逸時代に入りし時には旧來の氏族的社會関係は全く失はれ、その社會は家族を單位とし、土地私有制を有し、貨幣経済を知つて居る。彼等は南洋群島中規則的な農業であつて、ポイン人の輸入せる玉蜀黍、甘藷、煙草、珈琲等を耕作し、又運搬用としてリツピンに於けると同様なるカレータと稱する牛車を用ひる。その生産物は概して自家用消費に充てられるけれども、椰子果コプラ及び煙草は獨逸時代より既に商品化し、日本時代に入りては更に甘蔗が之に加はつた。

南洋興業株式会社に勤務する

徒給者として

そう商品生産者たる地位は更に進展した。又

（つゞく）

南洋群島

東京　文房堂製

日本人の企業及び移住者の増加に伴ひ、サパン島チャムロ族にとりてその所有地又は家屋を賃貸する者あり、或は賃銀労働に出役する等、彼等の商品生産及び貨幣経済の範囲は頓に擴大せられたのである。マリアナ群島以外に於ても、ヤップ島に移住せる チャムロ族はこの外ならず、アンガウル其他、他島に者も、農産物又は漁獲物の販売者、コプラ仲買人、若くはその農業又は漁業による生産物を在住日本人に販売し、アンガウル島採鑛所に於ては熟練労働者として、その経済的発達段階はカナカ族に比較して一般的にはチャムロ族の経済発達段階より高度である。

併しながら全体として彼等の生産は主として自家用消費に充てられる部分尚大であり、漸く部分的に単純商品生産の段階にあるに過ぎず、従ってその貨幣収入は比較的小であり、その収入せる貨幣は直に生活資料の購入に充て、或は退蔵し、又は資本化するものは殆んどなく、現在サイパン島にある椰子油製造の小工場が彼等唯一の資本的企業である。チャムロ族の経済は未だ全体として資本主義的特色を具備するものでなく、幾何の資本家的企

東京 文房堂製

業が將來に於ける彼等の中から起り得るやも尚疑問である。

獨逸時代にはサイパン島にヨセフ・アダ商會（資本金五萬円）あり、雜貨商を營み又石鹸製造工場を經營した。之が当時チヤムロ族唯一の資本家的企業であつた。然るに大正三年の暴風後貝殻虫発生して椰子果の生産が殆んど全滅したる結果、右の工場は原料難の為め閉鎖し、アダ商會はグアム島に移つた。然るに昭和七年末に至りアダ家一族たるゲレロが親戚二人（チヤムロ族）及び一人の日本人と共同して右工場の設備を利用し、コプラを原料とする製油事業を開始した。但し僅かに五名の職工を雇傭するに過ぎざる小規模のものである。

カナカ族の経済発達段階はチヤムロ族に比して截然たる低く、一般に貨幣経済の普及未だ幼稚であり、未だ多分に自然経済的要素を残存する。但し各島群によりて固有の経済発達程度を一様にはなし。

加ふるに外來資本主義との接触年月

東京 文房堂製

に長短の別ある為め、各島民の経済に多少の差異あるを免れない。概して言へば西カロリン群島ヤップ及びパラオに於ては島民固有の経済は比較的に進歩し、風に幼稚ながら栽培農業、土地私有財産制、並に貨幣の発達を見たのであるが、資本主義の接触を受けたる年代新しき為め近代的意味に於ける貨幣経済の発達は却つて遅れて居る。之に反し東カロリン群島に属するポナペ、クサイ、並にマーシャル群島にては島民固有の経済発達段階は西カロリンよ

り低くあつたが、比較的古くから欧米商人宣教師等の来島あり たる為め貨幣経済化への出発は却つて西部よりも早くあつた。更に中央カロリン群島は固有の経済的段階低く、加ふるに外人資本との接触も比較的遅くあつたのである。トラック諸島の如きは恐らく今日南洋群島中経済的発達段階の最も低級なるものであ

二、食物獲得の方法（生産方法）

南洋群島の如き熱帯地の未開土人にありてその経済的活動の大部分は生活資料殊に食物の獲得にあり、従つて食

東京 文房堂製

物獲得の方法が彼等の経済発達段階を規定す
る。各島群向に於ける固有経済の内容及びそ
の発達段階の差異は主としてその食物獲得の
方法に基く。而して食物獲得方法の差異はそ
の土地の自然的生産条件に基く処大である。
（以下各群島の食物獲得の方法を一覧しよう。）
ヤップ、パラオに於ける固有経済の発達が他
の諸島に比して高度なりしは、此両島に於け
る食物獲得方法が他に比して稍々高度なり し
ことに基くものと解せられる。以下各群島別
にその食物獲得の方法を一覧しよう。

南洋群島

先づマーシャル群島は全島珊瑚礁であって、
その土地は最も椰子樹の成育に適し（は最適であるが、）しかも
椰子以外には見るべき植物に乏しい。島民の
食糧は（ヒーエは）椰子果の外少量のパンの木の果、芋類
等（があるのみ）であり、他島に於ては全く顧みられざる夕
コの木の果さへ食糧不足のマーシャル群島は
於ては食用せられる。（島民は）也芋果実（を）は何れも自然
生のまま成熟し、島民は之を採取するに過ぎ
ず、農業と目すべきものは全く無つたのであ
る。然るに獨逸商人によりコプラの製法が傳

東京 文房堂製

へられ其の生産が奨励せられたる結果は部分的に商品化し、元來食糧生産に乏しき同島民は之を以て米、パン芋を購入し、かくて比較的に早く貨幣経済に触れたのである。

次にポナペ島の主要食は椰子果、パンの木の果、外ヤム芋である。之芋は此日主要食とする。椰子樹及びパンの木は勿論ヤム芋も亦山野の自然生にして、一塊の大き周囲一尺長さ数尺重量六貫に及ぶものあるも耕耘施肥等を為さず、やうやく稀に地堀棒にて土を穿ちて種芋を置き、又は蔓のからみつく樣木竹を添える位のことにて、農業と目すべきものではなかった。その外にはただカヴァの栽植を為すのみ（「農業としてはヤム及びカヴァを世話するのみ」—Ethnol. S. 135）。併しポナペに於てはヤム芋の産ある為め食糧豊富であり、東部諸島最高の文化を有し得たのである。

トラック島は南洋群島中パンの果最も豊富であり、ポナペ島は南洋群島中パンの果最も豊富であり、島民は之を主食物とする。ただ一年中その成熟せざる三四ヶ月の間は芋類を以て

南洋庁

東京 文房堂製

南洋群島

つこ労働を必要とすること最も少きものである。一年中パンの果の成熟せざる三四ヶ月の期間は芋類等を以て食糧を補給するも、概して食物不足の状態に陥ること多い。

食糧を補給する。

このパンの果は一年二回結實し、一樹の結實数頗る多く、その食物價値大であつて一顆能く二食分を支ふるに足り、又何等栽培を要せざる自然生産物であるがこの樹の分布は中央及東カロリンに豊富なるに反し西カロリン諸島に於ては比較的に少く、パラオ（パンの果少く）では夕ロ芋を主食物とし、尚日本時代の始め同島の食糧不足を補ふ為めに（夕ロ芋は）タピオカの栽培を輸入した。（又ヤツプではパンの果の外ボイの果等の自然生産物をも食用するが、主食物はやはり夕ロ芋、ヤム芋、里芋、甘蔗等の芋類である。夕ロ芋は古くから南洋群島に存在する食用植物であるがヤム芋の如く山野に自生せず、ただ限られたる濕地（主にマングローブ帶に近き低地。従つてマングローブ帶の相当発達せる島に於てのみ夕ロ芋田が発達し得たのである。）に於てのみ成育し、しかも自然生産せられる。のままではなく栽培によつて之を獲得する。従つてパラオ、ヤツプ、並に小範囲に於てはト

東京 文房堂製

ヤツプでもパンの果、ココ、タロ芋、ヤム芋、甘藷等の芋類を主要食とする。ヤタピ芋の栽培方法はパラオに於けると同様であり、ヤム芋其他芋類もヤツプでは栽培されるのであるが、この方法は

割り切

ヤツプの如く濕地の存在する諸島に於てのみ土を利用し得るのであるが、これも栽培といふも極めて簡単なる方法にしてこの方法は、濕地に入り手足を以て泥土を掻き交ぜ、前に入れ置きたる古葉を除き、タロ芋の新葉を泥中に敷き、木の丸棒にて土を穿ちその中に芋苗を挿すに過ぎない。泥中に敷く葉は緑肥の作用を為すものであるが、一度芋苗を新植したる後は施肥を為さず。又殆んど除草を為さずして自然の成育に放任するものである。ヤム芋、タピオカ

、甘藷等の栽培も亦空地又は焼畑に前記地堀り棒を以て穴を穿ち、其中に種芋を挿置するに過ぎない。かく幼稚簡単ではあるが、技術の適用と生産要具の使用を以てより高度なる生産方法を意味する以上、食糧獲得の方法として栽培農業の萌芽を知れるパラオ、ヤツプ両島民は、事ら自然生産物の採取を事とせる東カロリン及びマーシャル島民に比すれば高度の生産段階に位したるものであり、両島に於ける土地私有制及び固有貨幣の発達も亦

中央カロリン、

が此両島に於て比較的

を見たる方法

東京 文房堂製

南洋群島

也に照應せるものと解し得られる。

併し乍ら上述各群島に於ける食物獲得方法上の差異は要するに程度問題に過ぎず、全体としてその生産方法は頗る幼稚であり、その使用する生産要具は極めて未発達である。占領当時日本政府の派遣したる学術調査隊の一人は南洋群島の農具として洋刀、斧、地堀棒、フシェヨス、及びショベルの五種を掲げ、「以上は新領土に於て見る所の農具の殆んど全部なり、以て其農業の如何に原始的なるやを想像するに難からず」と言つて居る（東北帝国大学助教授明峰正夫「南洋新領土視察復命書」『南洋廳』南洋群島調査資料第一輯一二七頁）。しかも右の中洋刀（牛刀）はポナペにて最も一般的に使用せらるるものであり、第十九世紀初め白人商人が一呎八吋及び二呎の大形ナイフを輸入する迄はポナペ島民は竹製のものを用ひた。ポナペ島民も亦我国同様ナイフまたは斧なる語を使用して居るが、伐木除草等以外にも用ふるけれども他は廣き用途を有し、専門的

東京 文房堂製

なる農具とは認め難きのみならず、その輸入品たることは明白である。手斧はパラオ島に於て最も普及せるものであるが、之は寧ろ工具であつて、農具に数ふべきでない。フシエヨス（土語）は鉄製耕起部に五尺位の長柄を附せるものにして耕鋤、除草、中耕、堀採等すべて之によりて行ふものであり、群島中最も進歩せる農具であるが、之はチヤムロ族が西班牙時代に傳へられしものであり、マリアナ群島以外には見られない。農具レヨベル類

は近年の輸入品であるが、島民中之を所有するものは極めて稀である。従つて島民固有の農具としては植付穴を作り又は根菜類の掘採に用ふる為めの木の丸棒（パラオ語 tongtadel.）トラック語 Ot（Kubang）又は Opos（Bilip）があるのみ。この外にはモルトロク島にて一種の手鍬（Aufel）を用ふることの記載があるに過ぎない（Finsch, Ethnologische Erfahrungen, s. 323—24. 松岡七三五頁）。農耕上役畜を使用することは全く無く、ただサイパン

『ミクロネシア民族誌』

東京 文房堂製

島にて運搬用に牛を用ふるのみ。他島に於ても島民が牛を飼育するもの稀に有るけれども、之等は役畜として用ゐられざるは勿論、食用に供せらるることすら稀であり、多くは單に財産の表示又は愛玩物として尊重せられるに過ぎない。

島民は植物性食物の外に魚を食する。彼等の漁具は農具よりも著しく進歩し、釣具、投槍、網、筌、並に石堤、漁柵等の種類があり、一般未開土人の標準に比し遙かに優れて居ると稱せられる（松岡七三九頁以下）。蓋し海中の漁獲は地上に於ける自然性果實の採取又は芋類の植付に比して発達せる生産要具を必要とすることは当然である。併し乍ら魚介は副食物たるに過ぎず、島民経済の中心は植物性食糧の獲得にあつたのである。

島民は魚介の外には多く肉食しない。今日豚及び鶏の飼育は群島到る処に普及して居るが、之等は稀に食用に供せらるるのみにして、平常に於ては多分に愛玩用の意味を含む。

南洋群島

東京 文房堂製

南洋群島

且つ之等は凡て白人の輸入せしものである。

たゞポナペ島民が固有の犬を好んで食用したと傳へられるのみ。哺乳動物の天産を有せざる南洋群島の島民は嘗て狩獵又は牧畜種族たりしことなく、最初から自然物採取若くは原始的農業を主とし、之に漁撈を加味して生活し來れるものである。殊にパラオ島にて証明せらるる如く島民部落は始め海岸より離れた高地にあり、後に至つて海岸低地に移つたものとせば、彼等の原始經濟生活が植物性食物の採取より南始したことは一層の確實性を加へるであらう。

三、工藝

かく島民の食物獲得方法は簡單であり、殆んど生産の名に値しない程のものであつた。併し乍ら島民の文化程度は決して野蠻を以て目すべきものではない。蓋し食物獲得の方法は簡單であるけれども、熱帶地の豊かなる天惠は多く労せずして相当の食物量を供給したるが故に、彼等はその餘剰の労力を以て固有の工藝技術を発達せしめ得た。ただに食

東京 文房堂製

物豊富なる山島（主要島）の島民が工藝を有したるのみならず、食物豊富ならざる珊瑚礁島の島民も亦食物其他山島の産物と物々交換する為めに特殊の工藝を発達せしめ或は仲継商業に従事したのである。

島民工藝の種類及び発達程度も〻群島各部に於て一様でない。概してパラオ及びヤップは建築彫刻に勝れ、中部及び東部カロリンは織布に於て、マーシャルは編物に於て秀でて居る。又土器はパラオ及びヤップにのみあり

南洋群島

他に無く、之に反してパラオには全く織布も見なかつた。之等の工藝の地方的分布は一つには文化傳播の系統の異なるに負ふものであらう。即ちフィンシュによれば編蓆は東方マーシャル、ギルバートに発達して居るがそれはポリネシアの或部分にも存在し、土器は西方パラオ及びヤップにのみ見るものであるが之はメラネシアにも有り、而して織布はミクロネシア殊にカロリン群島に特に発達して居ると言ふ（Finsch, Ethnologische Erfahrungen, S. 10—11）。

東京 文房堂製

併し欠らたとゑ文化系統によりて也芽工藝の地才的分布が與へられたりとするも、それが能く其他に発達し得たるが為めには又その材料供給の資源の制約並に社會的生産関係の影響に負ふ処少くないのである。即ちマーシャル群島に多き夕コの木の葉の纖維は織布原料たるに適せずして編物に適するが故に、其地に於ては夕コを材料とする編物が発達し、敷物、被服（腰巻又は褌）、帆布等に利用した。

（後ろ同頁参照）

（右項には各部門に於ける工藝原料とした。）

況に織布工藝は東カロリン群島ポナペ及びクサイに最も発達し、トラック、オレアイ、ファイス、モクモク島中央及び西カロリン諸島に普及し、ヤップは織布分布の最西端にして同時に技術的に最低級であり、パラオには全く織布が知られなかつたといふ（Müller, S. 116—117. Krämer, Palau II. S. 138.）。かくの如き織布発達の地方的差異は、その技術傳来の経路が東方より西方に向つて行はれしものなる事を示すと共に、或限度に於て（程）その原料たる芭蕉の成育状態によりて制約せられたものであらう。

（と考へられる。）

参考。

東京 文房堂製

昭和七年中支廳別バナナ（芭蕉果）生産量ヤ（は）ップニ四八、五九五瓩、パラオニ九五、三一二瓩、トラックニ八二、五〇〇瓩、ポナペ四一一、三五〇瓩、ヤルートニ四、五四四瓩（である）。其処には

服装についての風俗の影響も認められる。ヤップ及びパラオの女子は或る種の草葉を綴りたる腰蓑を著けたのであり、その事は土茅南島に於て織布の発達せざりし結果でもあり、又原因ともなったであろう。同様に中央及東カロリンの芭蕉布織布の衰退は島民の服装が洋風化したる結果である。

南洋諸島の建築は他の未開土人の例に比して著しく進歩して居り、同じく太平洋諸島の中でもメラネシア及びポリネシア諸島よりも遙かに勝れて居る。各島民は氏族制度の生活に基き、通常"All Men House"と総称せられて居るところの部落共有の大集會所を有し、殊にパラオのアバイ（パラオ語共同集會所）及びヤップのペ・バイ（ヤップ語、同上）は

東京 文房堂製

南洋群島
214

~~利用~~誤謬あり、はその建築の雄大宏壮と彫刻の豊富にして印象的なるとを以て、今日尚文明人をして驚嘆せしむるものがある。この両島はただにバイ（集會所）の建築に於て秀でたのみでなく、島民住家の建築に於ても南洋群島中最も進歩したる様式と技術とを有する。かくパラオ及びヤップに於て建築の進歩したるは、建築材料たる巨木の比較的豊富なりしこと、氏族制度の最も高度に発達したること、及び更に基本的には既述の如

~~此~~の両島民が食物獲得の方法に於て~~凱~~幼稚なながら農業的段階に入りし結果であらう。即ちその主要食物の獲得は（方法は女子の労働による）芋類の栽培（を主とせる）~~により~~、その労働は女子の担る処なりし結果、食物の供給が継續的且つ安全となり、且つ男子の労力をば食物獲得より解放して長年月を要する大建築にも従事する餘裕を生じたのである。~~此~~

~~ップ島ヴァラヴァアト Valavat の大ペ・バイの如き、日本時代に入りし時に於て既に十年の歳月を費して尚未だ完全に竣工を見ざりしもの~~

東京 文房堂製

建築の形式を一にしない。パラオ及びヤップに於て集會所のみならず住家の建築も亦群島中第一であるのは、集會所建築の進歩せる当然の技術的結果たるのみならず、その氏族制度が高度に発達して家族制度に移行しつつある段階を反映するものであろう。而して氏族社會に於ける家族制の発達も亦根本に於ては定着農業なる生産方法に基因するものと考へられる。蓋し食物生産上一定の土地に定着する農業は土地私有制の物的基礎であり、家族制は土地私有制に立脚し之と同伴しつつ氏族社會の中から出現し来るが故である。

此の外南島民の工藝として挙ぐべきものは食器及び舟がある。南洋マーシャル群島並に中央及び東カロリン諸島にありては島民の食器は頗る原始的であり、木の葉又は椰子の殻に食物を容れ手づかみを以て之を食するを普通とした。炊事は所謂石焼きの方により、灼熱したる焼石の上に食物を置くのである。トラックの島民は種々の大さの木鉢を製作し、

東京 文房堂製

パンの果を搗いて餅とし、姜黄の根を搗いて黄粉（タイク）を製し、又は饗宴に際して食物を盛る葉の場合に用ゐるが、日常の飲食物はやはり木葉椰子殻等の天然器物に盛ること が多い。然るにパラオ及びヤップにては木器及土器が相当発達し、殊にパラオの木器に関しては「パラオ島民は此方面に於ても他の諸島住民よりも遙に進歩し、家毎に木製の洋器を備へ、来客の場合は勿論、日常の食事にも供用して居る。甚多種多様なることは我国に

南洋群島

も劣らず、色を塗り漆をかけ、螺鈿を施して装飾し、往々精巧眼を驚かすものがある」と言はれる（松岡五八八頁）。土器は南洋群島中パラオ及びヤップにのみ見られる処である。食物を煮る為めに用ゐられた。食器が東部諸島に於て不発達であり、トラック以西、殊にパラオ、ヤップ両島にて進歩したのは、主れ動食物獲得方法の差異に基くものであらう。即ち食糧が自然生産物の採取によりて獲られる処にては食器も不発達であり、原始的な ら

東京 文房堂製

栽培農業の存在したる処にてはその発達を見た。要するに夕口芋が食器を発明せしめたのであらう。殊に東に煮沸用器具として土器が木器よりも進歩せる発明なることは土俗學者の説明を待たずして明かであるが、ヤップ及びパラオにのみ之を有して他島に存在せざることは、之亦此両島の食物生産上の進歩によりて説明し得られるではあるまいか。（要するに夕口芋が食器を発明せしめたのであらう。）

最後に、島民が陸上交通機関を全然缺くに反し、舟の建造に於て相当の技術を有するは

南洋群島

其の地理的条件よりして当然であらう。通常は四五人乗の小形カヌーであるが、戦闘又は遠洋航行を目的とするものとしては五六十人乗の大型のものを有した。

以上の如く島民は編物、織布、建築、造船、器具製作等に於て未開土人としては比較的高度の技術を有した。が、彼等の併しその為めに使用した工具は極めて簡単であつて、織機は坐ますます織の手機であり、離れ離れの数個の木片より成る（松岡六八一頁以下）、建築造船其他木

東京 文房堂製

南洋群島

~~gebraucht (Krämer)~~

工の要具として最も一般的に且つ重要なるは又に曲柄をすげた斧（パラオ語カイバクル）であり、パラオ男子の殆んど肩身離さぬ日常携帯品である。其他の諸島に於ても一般に斧を用ひたのみである。ヤコ貝の又は貝類特に堅質なる硨磲貝を材料としたが、後鉄製の輸入品に代つた。島民は今日に至る迄之を以て伐木、製板、穿孔、彫刻等各種の工作を成し遂げる。彼等は又村木を結合固定するに一切釘を用ひず、凡て椰子

縄、椰子果外殻の繊維を以て製した縄を以て縛り付ける。その生産、要具の単純なるに比して技術の優秀なるには驚かざるを得ないが、それだけに一棟の共同集会所、一隻のカヌーを建造するにも長年月を要し、一枚の織布又は莫蓙を製作するにもまた長日月を必要とした。従つてその生産物が如何に技術的に秀れたるものありとはいへ、島民の労働生産力は高いといふことは出来ない。ただ之等工藝に於て一般未開人の水準以上の技術を示したる南洋群島島民

東京 文房堂製

の文化的段階は、決して野蛮状態と言ふことを得ざるものである。

四、生産組織

島民の生産方法は上述の如くである。次にその生産組織に就て記述しやう。生産要具の至つて幼稚なる彼等島民が生産行程上の技術的分業を有せざるは勿論である。彼等の仕事の分擔はただ男女別に行はれる。而して多くの労力を要する仕事は男子が之に当り、労力軽き仕事を女子が分擔する。男女体性の自然の差別に従ふのが自然であり、概して男子は椰子果、パンの果其他自然生産物の

漁業、工芸、航海、及び戦闘に従事し、女子は農耕、

採取、リーフ内魚介の採取、食物調理、織布、編物、及び洗濯に従事する。但し島嶼によりて必ずしも一様でない。但し島により一様でない。パラオにては女子が専らタロ芋栽培に従事する。即ちタロ芋以外に農耕をかりしパラオに於ては、農業は女子の専業であつたのである。蓋しタロ芋田の労働は決して軽いとはいへないが、山野を南墾して畑作を為し、又は喬木に攀ぢて果實を採るに比すれば遙かに女子の労働に適するのである。ヤップにてもタロ芋田は女子の仕事で

東京 文房堂製

南洋群島

ある。

あるが、男子も亦屢々之を手傳ふ。又ヤム芋其他畑作の為めの伐木、開墾整地等労力を要すること大なる仕事は男子之に当り、植付は男女共に当り、其後の見廻り、除草等は女子が従事する。

トラック島にても自然生産物の採取、畑作、漁業、それらの採取物の運搬、及び調理は男子の仕事であつた。畑作といつても例のマトグローブの地堀棒を以て植付穴を作り、椰子、芋、バナナ等を挿し込むだけのことにて其後はただ自然の成育に放任するのみ。その根よりタイクを製造するところの一種の薑類の草（土語 efet 若くは ぶたえ）も亦、地堀棒にて種芋を植付けるのであるが、之は一年毎にその植付地を変へ、除草を為し、稍々栽培の形を備へる（B.M.S. 1946. 森小年、二三頁）。二三の島には僅少のタロ芋畑もあるが、之はパンの果の缺乏期間の補助食に用ひられるものであつて、ヤップ、パラオの如き重要性を有せず、その労働も此処では男子が之に当る。但し

東京 文房堂製

南洋群島

曼

予少々に於ては男女混合の漁法あり、又漁業
もあつた。
~~がありも~~ 共にリーフ内浅海に半身を没し、円
陣を造り、両手に手網を持ちて小魚を漁する
法である。之れパラオ及びヤップの女子が全
く漁業に従事せざると著しき対照であるが、
珊瑚礁の環礁特に著しく発達して波静かなる
浅海の豊富なトラックにて、此島特有の女子
漁業の有ることは敢て奇とするに足りないであ
らう。此外織物も女子の仕事であつたが、輸
入綿布によりて固有織布の衰退したる今日、

トラックの女子は右の小漁業と洗濯、炊事、
育児に従事する以外には殆んど何の仕事を
も為さない。

ポナペにても山野の自然物採取、ヤム芋の
植付、漁業茅食糧の採取運搬は勿論、炊事も
多く男子の労働である。又クリスチャンの当時
は於ては
~~す処によれば~~ ポナペの女子の従事する仕事は織布
、帯やバスケット編物、屋根葺用のサゴ椰子
葉を結ぶこと、男子の腰蓑を造ること、身体
塗用の椰子油を造ること、水を酌み火を焚き

東京 文房堂製

石を焼きて食物を調理すること、其他すべての家事であり、「若し求められるならば彼等は喜んで男子の戸外労働を助け、戰鬪に際してはその夫や親戚に伴ひ勇敢に戰地に赴く」（The Caroline Islands, Christian, p. 73.）と記されて居るが、今日にてはポナペ女子の戸外労働は洗濯の外、稀に小魚捕り（ナイフを以て浅海の魚を切る漁法）に行くことあるのみ、炊事も多く男子の仕事とせられる。

パラオ及びヤップの女子は農耕に

よる食物獲得及び調理の為め勤労するに反し、トラック及びポナペの女子は殆んど全くこの種の仕事に従事しない。恐らく此の差異がパラオ及びヤップにては男子を食物獲得の労働より解放し、以て建築其他文化発達の基礎を為すものであるに対し、トラック及びポナペの文化発達程度が之に比して低き事実を説明する一の重要なる鍵たり得べきことは既述の如くである。而してトラック及びポナペの女子が食物獲得の為め労働せざることを以て氏

東京 文房堂製

族社會に於ける母權の反映なりとし、或は北に來パラオ、ヤップの女子が農耕労働に従事すること を以て此の両島に於ては女子の社會的地位低きが故であると解する者あらば、そは恐らく大なる誤謬であらう。蓋しトラック及びポナペは母系社會ではあるが、女子の社會的政治的權力が強大とである意味に於ては決して母權社會でない。之に反し女子が農耕に勤労するパラオに於て、女子の社會的地位は他島に於けるよりも高い。然るにヤップのありては

南洋群島

女子は同じく食物生産者であると称せられるけれども、其社會的地位は低いのである。蓋しポナペ、トラック両島の如く山野の自然生産物を食物とする処に於ては其の採取運搬に労力を要すること多く、従つてそれは男子の仕事となり、而して炊事調理も亦その延長として男子が之に当りたるものであり、之に反しパラオ、ヤップの如く主たる食物が低地のタロ芋田の栽培による場合は女子の労働を以て事足りたのである。女子が食物獲得及調理の仕事を擔

東京 文房堂製

得したるが故に尚ほ多少

母権は石土産農法

食物供給者たる資格に基きて社会的地位を獲

事情により女子が食物生産者となり、その

社会的権力の比較的強大であつたことの

べきものではなかつ

女子の地位の高下なる絶断的概念より演繹す

自然の分掌であり、決して代族社会に於ける

性と男女体力の差異によりて規定せられた

に基くのであつて、孔子土地の自然的生産系

当する中石は、各島の食物生産方法の差異

の結果であつて、その原因では無いのである

ばれるのみならず、食物の生産者たるが故にあるパラオ女子が adhalal a pelu（ブルーの母）と呼

ばれるのは単に子供を生産するのみならず、食物の生産者たるが故である。

れず、彼等はその夕口芋田を誇り、男女間

も婦人も自らこの労働に従事する（Kubary,

Notizen Über einen Ausflug u.s.w. s.159.）。

尚女子が食物生産者たる中石地に於て

東京文學堂製

221 南洋庁

南洋群島

尚又女子が食物生産者たるや否やによりて、社會に於て分担する女子労働の軽重を判断することも出来ない。ポナペ、トラックの女子は食物生産者では無かつたが、織布編物其他の仕事を有したのであり、殊にトラック女子の漁業は僅かの小魚を得る為めに屢々長時間を海中に過した。ポナペ、トラックの女子が今日特に無為遊惰であると見えるのは、輸入衣類と食物の影響によりて固有の織物、編物、並に漁業が殆んど全く衰滅したる結果であつて、決して女子の社會的地位高きが故に遊食して居るものではない。又一方に於てはヤップは男子の社會的権力強いけれども、同島の男子は女子と共に食物獲得の労働に従事する。要するに母系相續の事實より演繹して女子の社會的地位を高きものと推断し、更に進きて男女間の分業に際して男子が女子の為めに勤労し、若くは女子は遊食するものの如く推論することは根本的に誤謬である。男女間の仕事の分担はその社會的地位の上下に何等基礎する処は無いのである。

東京 文房堂製

南洋群島

島民の経済には上述の如く男女による仕事の分擔は行はれたけれども、個人的なる職業の的分化は未だ行はれなかつた。彼等の仕事は何等営業的意味を含まざるは勿論、主たる生計の途といふ意味に於てすら農業、漁業、工業等凡そ業と呼ばるべき性質のものでなく、各人何れも自然的を採取し、農し、漁し、且工する。故に例へば昭和五年南洋廳島勢調査書島民職業別人口表に於て九一・九%と記載があつても、調査書に断り書きある如くその中には上述の如き在來の生計様式、即ち專業無き島民を含むものであり、現在に於ても島民の大多数は此種の自給的経済を営むものなることを示す。即ち職業的分化を見ざるは祈禱巫術を為す者並に藥草の知識を有して医療を事とするもの、等特別の精神的能力又は知識を有する者であつた。之等特別の靈力を要すと認められしもの以外の仕事は、何人も之に従事する能力を有した。家屋カヌー等の工作に他より優れたる技巧を有する者あり

東京 文房堂製

下之に制衆作を依頼すること もあるけれども、被委託者が之を事業と為すのではなく、又委託者自ら家屋の建築修繕を為し得る。併し彼の依頼によりたるに対し、「我々島民は誰でも自分で家の工事をやらせたのである」との答であつた。

根本請負工事を他の島民に委託したる者に雇れ、その工事を請負へる者が大工なるやを質問し、「組合」の交誼として、即ちカルデベケル

10—20

貨幣の必要に迫られたる友人を援助する為め、換言すれば彼に貨幣収入を呉うが為めに工事を為しめたのである。事は技術的必要から起つた事ではなくして、社會的義務から出でた慣習である。カメーの建造については家屋の場合以上に特殊の技能を有する者が選別せられる傾向を有つが、併し之を以て専業と為す者があるのではない。要するに生産的労働の専門化は現在に於ても未だ萌芽的状態に於てのみ存する に過ぎない。

10—20

東京 文房堂製

30.
有沢洋均
227

五、財産観念

かくの如く島民の経済には職業的分化殆んど無く、その生産は自給的である。但しその事は決して個人的又は家族的孤立経済を意味するのではない。人類の抑もの原始的生活状態が個人的又は家族的孤立でありしや集團的共同でありしやの論争は問はずとするも、少くとも南洋群島島民の歴史的存在は氏族的共同生活より始まり、氏族社會が高度に発達するに及び始めて其中から生活単位としての家族が展開するに至つたのである。島民の生産は自給的であるが、（その生産は個人的自給ではなくて）其の元来の形態は氏族的自給であり、今日に於ても尚或る程度に於ても（ことを示す。）個人的ではなく氏族的にあり、従つて生産物の分配も氏族的に行はれたのである。この氏族より家族への発展過程は群島の全部に共通であるが、白人渡来当時に於てその到達せる発達程度は島群により一様でない。概して言へばマーシャル及びトラックに於て低く、パラオ及びヤップに於て高く、ポナペは中間的段階にあつた。

先ずマーシャル島民の経済思想に就て同島に在住久しき磯田熟氏の記述するところによれば、

「島民には『固有』〔私有〕の観念がなかった。例へばAがカヌーを造ったとしてBがそれを使用し度き時はBはAに向って、『おれたちのカヌーを出して呉れ』といふ。Aは快くBに手傳ってカヌーの仕度をしてやる。その代りAは他日Bの釣った魚を、『おれたちの食物』と稱して食べ、別に礼を言ふのでない。……此物資共有の思想は未だ相当に根強く島民の頭に入って居り、公金と私金との區別が判然しないものすからず、……賣買を意味するウイアなる島語は新語にして、以前はボケ（『持って行く』）なる語を使用せられて居た。……大漁の場合等何か大量の生産ありたる時酋長の所に持ち込むのは貢物と解すべきでない。食物の分配を乞ふ意味であって、酋長は自分の分を取ると残りを不公平なく庶民に分配した。文化の光を受け始める頃から酋長は之を貢物と解釈する傾向を現はし、島民も生産物全部を酋長の所に持ち込まず單に其一部を持って行く様になりつつある云々」

東京 文房堂製

（磯田勲『マーシャル群島の文化誌』）。

~~東京新報特別附録、昭和三年版~~

又同じくマーシャル在住の長き田中雪次氏が酋長に対する庶民の貢進について記述するところによれば、「この貢進は漸次衰へつつある。貢進物は主に椰子實、パンダヌス、パンの実、魚、也にラタツク列島の大部分ではマグモク（球根を晒して製したる澱粉）を加へる。也を受けたる酋長は皆に分與へるのだが、近時は酋長の誕生祝其他特別の場合の外

は皆に分け與へる程一時に多勢の者が持って行かぬから、持って来られた物を酋長は其ま ま取って置き、他の有り合せ又は用意の食物（米、食用ビスケット、パン、罐詰の類）を ば貢物持参者に饗應するか又は與へるかして 帰して居る者もある。貢進が贈答の形に変り 行くのも案外早いかも知れぬ。ジャボール（ヤ ルート島の市街）の如きは漁獲物は一般に賣 却するのを先にして居るのを見受ける云々」

（田中雪次『マーシャル群島の酋長と庶民』）。

東京 文房堂製

~~支那事変記念號~~ ~~昭和四年三月~~

別り

「即ち之等の記事によればマーシャル島民の経済は土地及び土地生産物についてのみならず、カヌー等動産についても氏族的共有の片鱗が示され、而して生産物の処置については氏族的配分より封建的貢納を経て個人的贈答、進んで交換に推移する過程が見える。併し固有の制度が尚未だ体に於ける氏族的封建制の段階に在るものであることは明かである。

~~と考へられる。~~

トラックについてボリヒは次の如く報告し

て居る。曰く「結婚のつながりと同じく家族のつながりも相当範囲が廣く且つ緩い。爭議喧嘩は甚だ多い。共同生活は今日尚概して所謂 Puipui（本來の意味に於ける兄弟姉妹、若くは同一氏族に属するもの、若くは單に友人たるものをも含む）の間に行はる。……かかる Puipui の間には或る種の共産制が行はれ、その制度は妻に対してまでも及ぶ」（Bollig. s. 102）。

又「トラック島民には私有財産制が存する。各個人は男女老幼を問はず土地、家屋、家畜、

東京 文房堂製

貨幣等の財産を所有し得る。……実際に於ては或る程度の共産制が行はれ、兄弟姉妹若くは同一氏族の所属員が屢々共同に住居し、土地を共同に耕作し、その生産物を共同に消費する。尤もこの関係は家族内に爭ひの起らざる間だけ維持せられるに過ぎない。この間接的共産制に対し、直接の共産制が例へば土地について存在する。これを fanu uon ar puipui 即ち同胞の土地と名づける。併しその全所有につき最年長の兄が特別重要の役割を占める」

(Ibid. S.120.)。又個々の家族相互間、同氏族員相互間、若くは友好氏族相互間に於て催す fadanap (饗宴) はトラック人の最も熱中する楽しみであつて、之に参加するものは二組に分れ競爭的に多量の食物を採取して共同集會所に運び、其処にて全体に分配する。此際配分の役に当る長老は多く持ち來れる者には多く與へる如くに注意する。而して彼は全食物を先づ氏族に対して配分し、各氏族の酋長が更に之をその部下に配分する。各自はその席にて之

東京 文房堂製

南洋群島

六號洞 フリ印

五號洞 6.09.4

phratry

食事し、若くは家に持ち帰る。のである。

S. 182—184 (による)。

以上はトラックの社會は土地及び土地生産物について氏族的共産制を有し、酋長に於て生産物の配分を為した制度が尚遺残するものと認められる。Tadanap に陸一参加者が二組に分れ各々競爭的に食物を持ち寄るといふのは、恐らく氏族社會の二分的構成の名残を示すものであると推察せられる。又 Pelpel が社會生活の単位なりといふはポリ上の事実に如く家族の範囲が廣いといふ事では去

而して配分に当りては多く持参したる者に多く與へる如く注意せられたるとい

くて、未だ家族の成立せざることを示す。即ち社會生活の単位は一氏族全体の共産ではないにしても、氏族社會の一部たる性質を有する共同生活単位団体であつて、家族は今後その中より更に分岐展開すべきものである。又各個人の私有財産制(ポリツヒの所説の如く)が原則であり、ただ實情に於て或程度の共産制が行はれるといふのではなくて、却つて氏族的團体の共産制が原則であり、実際に於てそれの解体過程として私有財産制が現はは

東京 文房堂製

れつつあるものである。（と解釋しなければならない。）現在に於ては土地そのものの私有制は未だ発達しないが、椰子樹パンの木茅地上の立木については私有が認められ、その結果として（立木の所有権も亦路国ではきく、若し）居る椰子樹も異れる所有者に属すること屢々である。但し他人の所有する木の果實を欲する時は椰子の若葉を之に結びつけ、（Bollig）という木の所有者が之を黙認する時はその果實を採取するを得るとの事である（Bollig, s. 123.）。更に又今日に於ても女子の漁獲物は酋長の許に持参

して配分を受け、然らざるも魚を獲て家に帰る途上若くは家にて食事せんとする際親戚友人の通行者あれば必ず之に分與する習慣があるといふのは（Bollig, s. 152. 参照）、何れも氏族共産制の遺残に外ならないであらう。

ポナペ島民の経済にも元来私有観念は無かつた。一八二六年より三年迄同島に滞留したる難破船員オ・コンネルの記述によるに、彼茅の間には物々交換についての何茅の概念も無く、土地は区劃せられて各々管理者がち

東京 文房堂製

るけれども、自然生産物たる果實はすべての人の共有物であり、多少の植栽を為すヤム及びカバ並に食用に供する犬だけが個人的所有の植栽者の有であるが、他人が食事する際して通りかかりたる者は何人でも之に加はりて共に食する事を得た。些細なる器具以外には私有財産なるものの無く、それすら自己の所持物を他人が必要とすれば何時でも之を拒否しない。島民が自己の船の釘其他の器具を持ち去ることを咎めたるに対し、彼等は曰く、白人

の船は之等凡ての物を豊富に所持して居り、少しばかり持ち去りても失ふ処はないであらう。又白人の船はその失はれたるものを極めて容易に補充するを得るであらう、恰かも彼等島民がその必要とする物を何でも出し得るが如くに、云々。(O'Connell, ss. 147—148, 166)。

Ed. future in Australian and the Greek

当時ポナペにありては既に封建的階級制度が最重に成立して居たが、経済的には尚氏族共産制を基礎としたることは明瞭である。尚ポナペの酋長の封建的性質並にその解消について

東京 文房堂製

は土地問題に関聯して本章第三節に詳述す。此処にはただその封建的性質も亦氏族制度に基くものであること、並に首長の封建的権利の一たるカマチップ（饗宴）も元来氏族員が各自の生産物を酋長に持ち寄り、酋長は自己の分を取りたる残餘を氏族員に分配したる内部に於ける生産物配分の慣習の遺残に外ならないのである。

パラオの島民は土地の中少くとも夕ロ芋田の苗芽が見られ畑地及び生産物については私有制であり、固有の貨幣制度も

発達したが、彼等の社會生活の単位は家族又は個人ではなかつた。彼等はカルデベケル即ち組合を組織し、之を以て戦闘、住宅建築、戦舟建造、及び或種の漁業を共同にする社會生活の単位と為したのであり、その饗宴には組合員が飲食物を持ち寄る義務があつた。桐岡氏は此の組合は氏族全体を単位とする経済から個別的家族経済への推移に於ける中間的段階と考へられる。

ヤップの社會にも尚全体として氏族制度の

東京 文房堂製

遺制を才から見るが、既に凡ての土地が私有であり、立木並にその生産物も亦私有であつて、若し自己所有の椰子の木の果實が盗まれた時には椰子の若葉をその木に結び付けて盗者に刑罰を豫告し、又椰子の枯葉を結ぶ時は何人もその木から果實を採取すべからずとの印であるといふ（Müller. s. 254）。即ち此島では家族を単位とする個別経済が比較的に進んで居り、固有の貨幣も発達して居る。但しヨナラブ神（Yonialau）の祭に際しその代りたる各部落

民が各種の食物、莚、貨幣等を持ち寄りて配分するのは（Müller. ss. 326. 328. 329. 330. 331.）、恐らく氏族共産制の遺習であらう。ヨナラブ神が氏族の祖先として見られること、考ふれば、一層右の推察を強める。又或る祭に際しては部落間の物々交換が行はれる。即ちヨナラブ神の Tek と Eet の月の祭にはガチヤパル及びオネアン部落はアムン部落に魚と貝貨を持参し、之に対して檳榔子、バナナ、及び椰子果を受取る（同上 三四頁）。

南洋群島

女神の祭の中、Tametaの月の祭にはアムン及びガチヤパルは貝貨及び魚をムル部落に持参し、之に対してアムンは夕ロ芋を、ガチヤパルは椰子果を受取る（同上三三九頁）。又Tamaiu神のMattaaの祭はマツプ及びルモン全島にて祝され、「村々の間に一般的なる貨幣並に食物の交換が行はれる」（同上三四二頁）等々。之等祭禮に際して村々の間に物資の交換の行はれるのは年市の形態に於ける国内商業の濫觴であらう。

之は氏族内配分が進展して交換となつたものか、或は他氏族相互間の対外的交換に基くものであらう。何れにしてもヤップの祭に際しての物資の配分並に交換は、氏族内共産（共）氏族相互間物交換の旧慣を留めるものと考へられる。此の外今日尚貨幣の必要に迫られたる島民は酋長又は知人の何人からでも一個の分與を要求する権利ありと為される如きも、過去の氏族共産制を暗示する遺習の一つと推察せられる。

上述の如く島民社會は氏族制度の下に於ける

東京 文房堂製

南洋群島

六、物々交換

上述のごとく島民社会は氏族的基礎に立つる共産制、封建制、家族制の何れかの段階にあり、その範囲に於て自給経済をなしたのであるが、元来島岸狭小にして天然資源の限定せられて居る各島民の自給経済は始めから甚だ困難を受けた。

制限せられたものであり、従つて一方に於ては島内食物資源保護の為め其の採取又は食用について各種の禁忌を制限を規定し、他方に於ては他の種類の生産物を有する島岸間に於て早くから交換が盛に行はれた。食物採取又は食用の制限としては、或は家屋建築中バナナ及び芋の食用を忌み、（松岡千六一頁）、又は祭の期間には他島他村に食物を運ぶことを禁じ、（同）又部落毎に食物の禁忌あるもの、（同）或種の魚、バナナ芽は酋長にのみ食用が許さるる等（松岡千六一頁、同三五五頁）、（松岡、同三五四、三五八、三六、三五三頁）の事が数へられる。トラック島の食物禁忌についてボリヒは曰く、「食用となる果實又は動物にして、禁止（bizi）に触れ或範囲に於て食用を禁ぜられざるものは殆んど一として ない。此の禁止の範囲は必ずしも等しくない。

東京 文房堂製

或るものは一定の時期だけ、或ものは常時、又或るものは或る個人にだけ、或るものは全氏族に及ぶ」（Dalle. p. s. 37）。その個々の具体的禁食については同四四、四八、六三、六八、六九、七二、及び七九頁を見よ。ヤップにては新しき網にて捕獲したる魚を女子の食することを忌みわ、漁に従事する男子は椰子果、タロ芋、ヤム芋の外一切の食物を忌み、（同八四頁）、姙娠の時は両親ともバナナ、或種のタロ芋及び魚の食用を忌み、（同二四頁）、各個

人の階級（Yegum）毎に食物禁止あり、（同二四頁）、死者ありたる場合はその家の附近其他にて果實採取の禁あり、（同二二四頁）、神を祭るにもバナナ、ヤム芋等の禁食あり（同二二四、二四八、二七四、三二六、三三四、三三八）。夫、三三四、三五八）。之芋は多くは巫術迷信と結び付いて居る。之芋は要するに島内に於ける食物の消費及輸出を調節し、以て人口を支持せんが為めの制度と見るを得、自給自則を保護する方法としてそれ自体自給経済の一部を為すものである。一方他島との物々交換

東京 文房堂製

* Curcuma, = reng (Krämer)
ran (Bollig)

諸島民間物々交換には、クサイ、トラック、グアム、及びヤップを中心とする四つの主要系統があつた。

A、クサイを中心とする貿易。

マーシヤル及びギルバート島民は椰子縄、魚鈎等を持つてクサイに來航し、パンの果其他の土地生産物並に織布と交易した。又クサイ島は姜黄粉の産地として東方諸島交易の中心となれること、恰も中央カロリンに於けるトラックの如き位置にあつたとザルフエルトは

東京 文房堂製

については、同一氏族が数島に分居して相互間に交換を為す場合は氏族的自給経済の一部と看做し得るが、全然氏族的関係を有せざる他島との交換は自給自則の例外であり補足である。遠洋を隔つる他島との物々交換は最初は漂流による偶然の発見から始まつたものであらうが、後には交換を目的とする計画的航海が行はれ、島民間に於ける航海に関する知識及び技術の異常なる発達を見るに至つたのである。

説明
ターゲット

この原本は、破損のまま撮影します。

推断して居る（ザルフ（モルトロクサイ）ニニ一ニニ二頁）。

Confect, Kusaie. 55. 221-222）。

B. トラックを中心とせる貿易（移住三五七以下参照）。

(1) ネマ、ロソップ、ナモルク、モルトロク等南オ離島より椰子縄（ヌン）、蕃（タナウ）、玉鬘（リマム）、赤具珠（フオウルク）、黒白聯珠の帯（キン）、赤具珠聯珠（アッサン）をトラックに輸入し、トラック産の姜黄粉（タイク）、織布、装飾品、食糧と交易した。（モルトロク、トラック間一七五浬）。

(2) フアナス、ナミウン其他北方離島からは椰子縄、蕃、帆蕃（アマラ）、鼈甲（プエジ）と持ち来り、トラックのタイク、織布、装飾品、食糧と交易した。

(3) 西方離島ポロアト島民は自島産椰子縄、蕃、帆蕃の外に、グアムより輸入して得たる鉄大鉈（ジヤパジヤプ）、鉄斧（ジレク）、手斧（ジエレ）等の鉄器を持ち来り、タイク、織布、食糧其他のトラック物産と交易した。（ポロアト、トラック間一七〇浬）。

東京 文房堂製

南洋群島

(4) ポロアト島には附近の西部離島に属するスク、タマタム、プラプ諸島からイチビ（ヒビスクス）布、パンダヌス締物等の物産を持ち来り、ポロアト島民がトラックより得来れるタイク、又はグアムより得来れる鉄器と交易した。又ポロアトとオレアイとの間にも交通があり、オレアイはヤップと交易したるが故に、ポロアト島はトラック、及び附近諸島とグアム及ヤップの仲継貿易の中心であつた。トラック島民自身航海に出ることは稀であつた。

C、グアムを中心とする貿易。

(1) ポロアト島民はサタワルを経てラモトレクに来り、其地の舟と合してグアムに北航し、鉄器、ガラス珠、布片を購ひ帰つた。それ等の品はポロアトを経てトラック及びその附近諸島に達したること前述の如くである。

（ラモトレク、グアム間三〇〇浬）、

(2) オレアイ島民はファウラプ島を経、其地の舟と合して北航グアムに達し、同じく鉄

東京 文房堂製

器其他を持ち帰つた。而して之芽はオレアイからソロル、ウルルシ、及びヤップに傳はつた。グアムで最も需要せられたのはオレアイ及びエラトの舟であつたといふ。（フアウプ、グアム間ニハ。浬）

D. ヤップを中心とする貿易。

(1) ヤップ島とウルルシ、フアイス、ソロル、オレアイ等西方諸島との間。之等離島民はヤップに織布、椰子縄、帆蓆、椰子殻にて製せる裝身具、椰子果製の食糧品等をもたらし、

ヤップより姜黄粉を得た。尚上述の如くグアムの鉄器はオレアイを経てヤップに入つたのである。

(2) ヤップ島と南方ヌグル及びパラオとの間にも交易があつた。（トラック以下に就ては松岡三五七—三六二頁参照）

以上クサイ、トラック、グアム、ヤップをそれぞれ中心とする四つの貿易系統に於て、之等離島の主要島の島民の側から航海に出かけたのではなく、多くは珊瑚礁島たる離島

東京 文房堂製

民の方から交易を求めて主要島に來航したのである。蓋し主要島は食糧其他土地物産比較的豊富であつて自給的基礎大なるに対し、面積及び土地生産力の狹小なる礁島民は其の工業品を交貿品として山島より食物其他土地生産物を入手する必要大なりしによつた。ただヤップ人のみ自ら西方及南方諸島に向つて積極的に遠征したのであるが、それは主として武力征服の為めであり、交易の為めには概して離島民がヤップに來航した。而してウルルシ、ファイス、オレアイ等西部諸島に武力遠征したるヤップ人はウギリ及びガチヤパル地方の者であり、又南方ヌグルに遠征したヤップ人は多分ゴロール地方の者であつたが、その結果今日に於ても尚上記のウルルシ及下西部諸島はヤップ島内ウギリ、ガチヤパル両管区の属地であり、ヌグルはゴロール管區の半属地たる関係に立つ。然るにウギリ、ガチヤパルはヤップ島東部の地味変せるトミール地方にあり、ゴロールはヤップ島南部の隆起珊瑚礁より

東京 文房堂製

成る低平地方であり、何れもその土地生産力はヤップの他部分よりも劣り、自給的経済の基礎が比較的小である。この自然的条件に促がされて彼等は各々地理的に隣在する離島に対して武力遠征を企て、その征服の基礎の上に物々交換の関係を設定せしめたものと考へられる。即ちヤップ島を中心とする貿易の場合に於ても亦、交易は自給的基礎薄弱なる島民の側から求められ来るとの原則を全く素すものではない。

クバリ及びクヒトヤリによるに、パラオ、ポナペ、及びクサイ島民は嘗て自ら遠洋航海に従事せざりしのみならず、獄りポナペ、パラオ両島に他島民の来りて之と交易するものも多くなかつた。パラオは中央カロリンよりヤップへ航海する者が漂流によりて偶然到着したかつたのする等の外は、他の群島に多く知られず、アイス島民がカヌーの材料たる木材を得る為めパラオに来り姜黄粉、織物、がう（赤色貝片の首飾）等と交換した事があると言はれる

東京 文房堂製

6 一字下げ

一般的に言つて各島嶼間の交易は主要島民が積極的に開始したのではなく、自給的経済の基礎たる土地生産力の狭隘なる小島民の側から進んで求めたのである。それは資本主義の貿易の如く過剰生産物の輸出を主因とするのでなくて、過小生産の不足を補充するを主眼とした。即ち自給を主体とし、交易はその補足たるに過ぎなかつたのである。

クバソー及びクレーマーによるに、パラオ、ポナペ、及びクサイ島民は嘗て自ら遠洋航海に従事せざりしのみならず、ポナペ、パラオ両島には他島民の来りて之と交易するものも多くなかつた。パラオは中央カロリンよりヤップへ航海する者が漂流により偶然到着する茅の外は、他の群島に多く知られなかつた。ファイス島民がカヌーの材料たる木材を得る為めパラオに来り、姜黄粉、がう（赤色貝片の首飾）茅と交換した事があると言はれる

（つゞく）

東京 文房堂製

一般的に言つて各島嶼間の交易は主要島民が積極的に開始したのではなく、自給的経済の基礎たる土地生産力の狭隘なる小島民の側から進んで求めたのである。それは資本主義の貿易の如く過剰生産物の輸出を主因とするのでなくて、過小生産の不足を補充するを主眼とした。即ち自給を主体とした交易はその補足たるに過ぎなかつたのである。

最後に、島嶼間交易と氏族間交易との関係には次の三種があつたと考へられる。

が、フアイス島民の主たる交易はヤップとの間に為されたのであり、パラオへの来島は稀なる例外的出来事に過ぎなかつた（Krämer, Palau S. 172—173）。かくパラオ及びポナペ島民の航海及交易が発達しなかつた理由としては、第一に此の両島は南洋群島中の最大島であつて自給的基礎大であり、両島自身から他島に交易を求むる必要少きこと、第二には地理上此両島に来り交易すべき有力なる珊島群が附近に存在せざることに基くものと考へられる。

東京 文房堂製

(1) 友好、敵對、何れにせよ全然氏族的関係無き他島群との交易。例へばマーシヤルとクサイ、オレアイ又はポロアトとグアムとの如き場合。

(2) 他島との交易が同一氏族相互間の交易として行はるる場合。例へばトラツクと其離島との間の如し。トラツク島群には四十餘の多數の氏族が存在するが、之等は決して一島一氏族の居住にあらず、却つて各氏族は廣き範囲に亘りて散在する諸島に分居したのである。

故に各島間の交通といふも實は各島に散在せる同氏族若くは友好氏族間の交通であつて、異氏族又は敵氏族との間には戰鬪掠奪が行はれた。従つて離島より交易の為めにトラツクに來航するものは其取引部落が一定して居たのである。「來航者も氏族的又は姻戚的縁故のあるもののみと交易し、多數取引部落を有する者は之を歴訪するのであるが、誤まつて敵氏族に遭逢すれば交易が行はれぬのみならず、奇禍を買ふ虞があるから、取

東京 文房堂製

引地に到達した場合にも即時上陸する様なことはない。……甚故に海岸から遠く離れて舟を停め、陸上の様子を察し十分安全の見込がつくまで近接せぬ」のであつた（松岡三六。頁）。

この種の交易は前にも一言せる如く氏族自給経済の内容を為すものであつて、恐らく最初に於て亜氏族乃至多の氏族内の配分より轉じて交易となつたのであらう。

(3) 同一島内又は島群内に於ける異氏族との交易。同一島内に数氏族がそれぞれ部落を為して生活する場合には友好氏族と敵対氏族との別を生じ、かくして友好氏族相互間に於ては物資の交易が行はれるに至る。蓋し同一島若くは島群内に於ても土地生産物及び工藝品の生産に関し地方的差異が有るからである。この種の交易は氏族的には外部交易であるが地理的には同一島の内部交易であり、それだけ自給経済の単位としての氏族は重要性を減じたるものと言はねばならない。かくして氏族制度（生産及び配分の単位としての）も内容に変化を生じ、が家族制に推移しつつある段階の島民に於

東京 文房堂製

54
南洋群島
251

たは、自給経済の単位は家族を去るに傾き、
従つて交易の単位も亦家族又は個人となる。
茲に於て社會総生産物に対する各個生産者
の関係（参照）は氏族内配分の性質を全く失ひて、各
人間の交換なる性質に轉ずる。而して規則的
なる交換は、交換の媒介物たる貨幣を発生せ
しめる。かくして南洋群島中氏族制が最も高
度に発達して（的段階に近づき）家族が自給経済の単位となり、
土地生産物の完全な私有を見たるヤップ、
パラオの両島（に於て、又此の両島に於てのみ比較的）
中、而して此の両島底のみが
発達したる固有の貨幣を有したのである。（はなはだ当然）

東京 文房堂製